

# まな Viva!

「京都丹波 まな Viva!」は、学校と先生を応援する南丹教育局の学びのニュースです。

## 「なんたん学びモデル推進校」の実践研究

なんたん学びモデル推進校では、学び続ける子どもたちを育むためにどうするか試行錯誤しながら、実践が進められました。多様な価値観と多様な学び方が広がる中で、教育「観」を改めて問われるようになり、そのためには、教師自身の学びをとめないこと、探究心をもって学び続ける姿勢が大切です。

2月16日に行われた推進校連携会議及び実践交流会では、園・校内研究を推進するための組織的な取組や授業改善の工夫などについて、各推進校から実践報告がありました。その実践研究から、管内の各園・校で大切にしたいポイントをまとめましたので紹介します。

- <1年次> 亀岡市立亀岡川東学園 南丹市立園部幼稚園 南丹市立八木東小学校 京丹波町立下山小学校 京丹波町立瑞穂小学校
- <2年次> 亀岡市立南つつじヶ丘小学校 南丹市立園部中学校 南丹市立殿田中学校

### 1年次推進校の研究紹介

○実践・研究内容 ☆成果・変容

#### 亀岡市立亀岡川東学園

##### 【研究主題】

自分ごととして学ぶ子ども  
～様々な課題を、思考を働かせて工夫しながら解決したり、よりよい方法を見つけたりできる児童生徒の育成～

##### ○ユニット(小グループ)編成による教員の協働的学び

- ・ 研究主題についての共通認識
- ・ ユニットメンバー内での授業研、外部講師を招いての校内研等、教員の学び合う機会を計画的に設定

##### ○テーマ設定、個人レポート作成で研究を自分ごとに

- ・ 年間を通じて加筆・修正し授業改善に努める

☆個人レポートを作成することで研究が自分ごとになり、自身の授業実践を見つめ直す機会となった。

☆児童生徒へのアンケートにおいて、「授業を受けてもっと知りたい、調べてみたいと思った。」「実際に調べたり、自主学習をしたりした。」などのポイントが上がった。



ポイント

- ◇共通理解によりベクトルをそろえる
- ◇「自分ごと」にして学ぶ、児童生徒と教職員の学びの相似形

#### 南丹市立園部幼稚園

##### 【研究主題】

夢中になって遊ぶ幼児の育成  
～遊びから見える10の姿を通して環境や教師の関わりを探る～

##### ○「和(wa)になって語ろう会」により保育を語り合う風土を形成

- ・ 子どもの学びに視点を置き語り合うことを重要視
- ・ 目的を明確にした持続可能な研究推進

##### ○校種をこえて共に学び合える園内研修会

- ・ 市内の保育所、こども園、近隣の小学校への参加呼びかけ

☆「楽しい」と心を動かし、「明日も～しよう」と遊びを継続することで、子どもたちは夢中になって遊ぶ姿となり、学びはより深まっていくことを実践を通して感じる事ができた。

☆研究グループごとにテーマや実践発表などを自由に設定したことで、新しい発想で教諭一人一人が主体者となって取り組む実践、研究が進められた。



ポイント

- ◇子どもを真ん中にした語り合い
- ◇就学前教育や幼少接続の推進

#### 南丹市立八木東小学校

##### 【研究主題】

主体的に学び、つながり合い、自ら動き出す児童の育成  
～言語活動の充実を通して～

##### ○言語活動を基盤とした国語科・特別の教科 道徳・特別活動の研究

- ・ 育てたい児童像の具体化と共通確認

##### ○「話したい」「聞きたい」「話し合いたい」を大切にした言語活動

- ・ 常に相手意識に立った学習姿勢の意識付け
- ・ 発問の精選、揺さぶり(問い返し)等により深く考える力を育む
- ・ 児童が話し合いたい課題意識と明確なめあて

☆国語科の「話す・聞く」教材や「説明的文章」教材を通して

児童が「話したい」「聞きたい」と思う指導等について学び合えた。

☆特別活動において児童発のアイデアあふれる主体的な活動ができた。

☆「親子道徳」の取組により学校・家庭・地域が道徳的価値について共に考える機会になった。

ポイント

- ◇日常の教育活動の積み上げ
- ◇児童発のアイデアを大切に取組

#### 京丹波町立下山小学校

##### 【研究主題】

互いを認め、自ら考え行動しようとする児童の育成  
～ゴールを共有し、コーディネートする～

##### ○授業研究会での学びを日々の授業につなげる

- ・ 低・高学年ブロックに分かれて事前前研を実施→事前研は全体で行い、協議したい部分を焦点化して模擬授業を行った上で協議→事後研はKPT法を用いて協議し、記録は職員室内に掲示
- ・ ふりかえりシートを作成し教師も児童も学習の見直しをもつ

##### ○「A(あそんで)T(たのしく)M(まなべる)コーナー」の設置

- ・ イラスト、五七五等を掲示し、得意なことやがんばりを認め合う
- ・ 非認知能力を育む

☆得意分野をきっかけに様々な分野の取組に参加する児童が増加した。

☆アンケート調査から自己肯定感や自尊感情の高まりが見られた。



ポイント

- ◇学習や学校生活への関心の高まりを学力向上へと結び付ける
- ◇学年を超えた単元のつながりを意識

京丹波町立瑞穂小学校

【研究主題】

- ・子どもが創る学校 ～自ら考え、自ら動く子どもの育成～
- ・小学校における教科担任制を通して、互いに学び合い、高め合う校内組織体制の確立

○児童の主体性を引き出すためのしかけ

- ・チームで目指す児童の姿の共有とベクトルを合わせた指導
- ・児童側からの視点を捉えた授業改善

○教科担任制・交換授業・TT・少人数授業

- ・全員で児童を見ていく組織を確立
- ・互いの授業力を高める

☆学級会と実践を繰り返していく中で、学校生活における主体性や自分の思いや考えを伝え合う力が向上した。

☆各学力調査において国語科や算数科のポイントがアップし、非認知能力に関する質問項目においても肯定的回答が増加した。



◇児童が主体的・対話的に学び合える授業の構築  
◇「学校体制で児童を見ていく」という教員間の意識を広げる

ポイント

2年次推進校の研究紹介

○実践・研究内容 ☆成果・変容

亀岡市立南つつじヶ丘小学校

【研究主題】

積極的に自分の意見もち、伝え合う児童の育成  
～人間関係を築き、よりよい学級・学校づくりを目指す特別活動～

○全員が共通の土台にのり、全員が参加できる話し合い活動

- ・学級会の流れ、議題設定、司会の進め方、板書の仕方、合意形成への見通し等、一定の「型」を構築
- ・視覚支援（色分け）、ロイロノートの活用等
- ・各学級での取組を学校全体に広げるためのしかけ（議題設定、掲示物等）



学級会 決め方

- 新しい考えを作る  
「AとBの意見のよいところを多く挙げて、Cという意見にしてはどうですか？」  
「Cの意見にするときみんなの意見が入れられるね。」
- 意見を合わせる  
「AとBの意見を合わせてABの意見にしてはどうですか？」  
A + B → AB
- 意見性を決める  
「Aは△△の意見を言うこととして、今回は○○の意見に決めていきます。」  
「△△の意見は、休み時間にクラス議決してはどうですか？」  
A B → A
- 条件をつける  
「○○の意見は△△ということをつけ加えるといえます。」  
「△△の条件が入れば、みんなが決めた条件に合うので、○○の意見がいいです。」  
A + B → B
- 少しづつ全席行う  
「Aの意見とBの意見について、時間を短くして両方行いたい決めていいですか？」  
「みんなの意見をまとめて、上手くできるか考えたい方がいいと思います。」  
A + B → AB
- 意見を認め、ゆずる  
「○○さんの意見はよく分かりました。みんなの意見を聞いて、今回は私の意見ではなく○○さんの意見がいいです。」  
A + B → A
- 多数決を行う  
「多くの意見について話し合いましたが決まらなかったので、今回は多数決で決めていきます。」  
A + B → A

ポイント

◇自分たちで話し合う経験の積み重ね  
◇聞いてもらっているという安心感から  
思いや考えを伝える楽しさの実感へ

○アンケートの作成・分析

- ・児童の話し合いに対する意識を調査（4月、10月）



○計画的な授業研究会及び他校への波及

- ・なんたん学びモデル推進校授業研究会の開催
- ・亀岡市小学校特別活動研究における授業公開

☆司会、書記等多くの児童が経験することで、学級会での発言が増え、みんなで話し合いを進めていこうという思いが強まった。

☆板書の方法や色分けを検討する中で、発達段階についても考えながら取り組むことができるようになった。

☆アンケートの「意見を言うことが好き」「理由を考えて言える」「学級会の流れがわかる」の項目において肯定的意見が増えた。

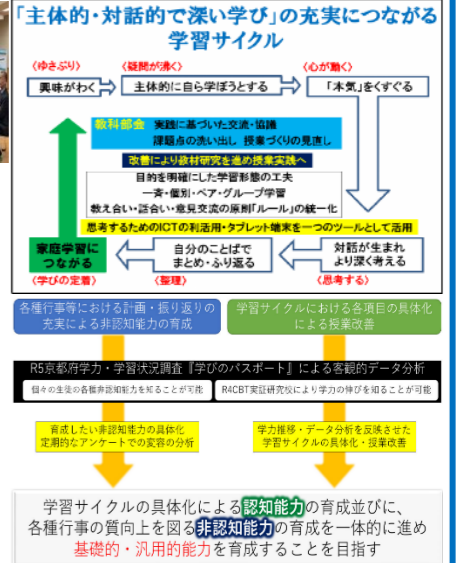
南丹市立園部中学校

【研究主題】

認知能力と非認知能力の一体的育成に資する「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善とキャリア教育を基軸とする学校行事等の充実

○認知能力の育成に係る研究

- ・授業改善  
学習サイクルを具体的な指導法に落とし込む  
発信力・傾聴の姿勢を育む
- ・家庭学習の充実  
スモールステップを踏んだ指導、授業とリンクした学習課題
- ・教科部会の充実  
学習目標の明確化と振り返りによるメタ認知、自己調整力の向上と見方・考え方を働かせ、経験・発想の多様性を生かすことができるようなしかけづくりや工夫



○非認知能力の醸成に係る研究

- ・「目標に向けて取り組む姿勢」「計画性」「チャレンジ精神」を重点化
- ・学校行事等における目標の個別化・具体化と、教師による声かけ
- ☆学習サイクルの具現化と指導への落とし込みにより汎用性を高めた。
- ☆教職員全員で分析したことにより、その後の教育活動において重点を意識した声かけを全員で行う方向で確認ができた。
- ☆個別の目標をもたせることが、自分の成長を感じるとともに、非認知能力についても個人のメタ認知による伸びの実感につながった。

ポイント

◇学びのパスポートの客観的データと普通の観察による子どもの見取り  
◇自分の成長を振り返り、実感する

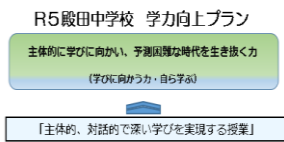
南丹市立殿田中学校

【研究主題】

主体的、対話的で深い学びを実現する授業作りの推進  
～ねらいにせまるICTの利活用と言語活動の充実～

○学力向上プランをもとにした具体的実践

- ・家庭学習（家庭学習時間調査、個別ファイル、AIドリル等）
- ・授業改善（ICT活用、公開授業週間、計画的授業研究会等）
- ・学習環境（授業スタイル策定、自主学习プリント棚や学習室の設置等）
- ・自己肯定感UP（全校伝達表彰、生徒作品・記録等の掲示・展示等）



○アンケート結果等の見える化

- ・家庭学習時間やAIドリル取組時間の提示と声かけ
- ・学級通信等を通じた保護者への周知



○中学校ブロックでの取組の充実

- ・小中一貫した取組（家庭学習時間調査等）

☆年3回の家庭学習時間調査の結果について「見える化」を図ることで、学習時間がどの学年においても増えた。

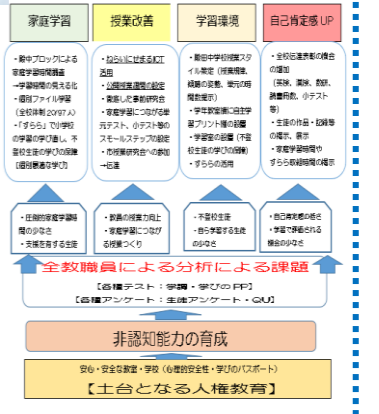
☆多くの生徒が積極的に各種検定や取組に取り組むようになり、特に英語検定については成果があった。

☆個別ファイルに取り組むことで「何を学習したらよいか」「どんな学習方法がよいのか」がわかった生徒が増えた。

また定期テスト等で成果が表れた生徒もいた。

ポイント

◇将来、社会の中で自立した人間を育成するために学びの姿勢を確立させる  
◇個の見取りを指導・手立てに生かす



京都丹波の教育推進事業「なんたん学びモデル推進校」の研究推進校の報告から、次年度に向けた取組のポイントを3点にまとめました。

## 環境を通して行う教育へ

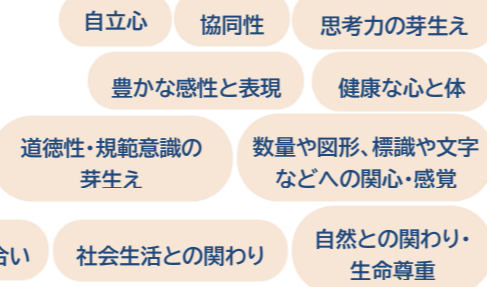
### 環境づくり(物的環境、教師のかかわり)

- 「教える教育」から「環境を整える教育」への転換をする。
- 安心して学ぶ環境が、自ら学ぶ力を高める。
- 学びを自分ごとにし、子どもたち自ら自発的に、ひと・ものと関わり合いながら、学びを深める。
- 「子どもは有能な学び手である」という意識を大切にす。
- 子どもたちが夢中になる、心が動く学びをするために、どのような環境を整えるとよいか考える。



### 学びや学び方のつながりを意識～幼児教育の成果をつなぐ～

- 幼児期の終わりまでに育てほしい「10の姿」を共有する。
- こ・幼・小・中が同じベクトルで研究を進めることで成果が上がる。また、家庭や地域への発信も効果的である。
- 幼児期に総合的にはぐくまれた資質・能力や子どもたちの成長を各教科の特性に応じた学びにつなげていく。



### UD視点

- 指示、板書(色分け)等の工夫をする。
- タブレット端末を効果的に活用する。
- 個に応じた支援を組織的に継続する。



自分のやりたいことに向かって心と体を動かす

子どもが、自分で選択・判断できる場面を!

子どもに学びを委ねる

- 教師が指示した「同じ学習課題」に対して、
- 教科書にある「同じ教材」を用いて、
- 教師の指示に従って学習全員が「同じペース」で一斉に学び、
- 学習全員が「同じ結論(まとめ)」に到達する

4つの「同じこと」のどれかを履修だけでも、今より多様性を認めていくことができる。

その時期に、教科書の配列がそうになっているから、その単元の授業をする

子どもが主体

子どもの実態や子どもの求めからスタートに

学びの必然性

心が動く授業～「本気」を引き出す～

- 子どもが問いを見つけ自ら動き出す授業展開や発問を考える。
- 単元ゴールを魅力あるものにする。
- 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る。
- 子どもが自分で選択・判断できる場面をつくる。
- 探究的な学びを展開する。

学ぶ必然性があり、学びの本質が明確な単元デザイン

- 子どもの実態や求めから教育活動、単元をスタートする。
- 指導者の視点から学習者の視点で単元デザインをする。
- 授業のポイントを焦点化する。
- 学んだことが他教科・領域等でどのように活用できるか考える。

自ら意欲をもって取り組む家庭学習

- 子どもが、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」がわかる。
- 授業と家庭学習をつなぐ。

## その子(個)を見取る

### その子(個)の見取り

- 子どもの学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくというサイクルをより重要視する。
- その子がどんな学びをしているのか、何をきっかけにどのように変容しているのかをつかみ、一人一人の可能性を最大限に引き出していけるようにする。
- 教師の「気づく力」の感度を高めることが大事。



### 自己の学びを振り返り、学びをコントロールする

- 自らの変容を客観的に捉え、学び方を自己調整できるようなしなかけをする。(単元を通した振り返りシート等)

### データを効果的に活用した RV-PCDA サイクル

- R (Research: 現状把握) と V (Vision: 方針の共有) を大切にし、学力テストや授業評価アンケート等の客観的データの分析と普段の観察から、指導・手立てにつなげる。

## 子どもの学びと教師の学びを相似形に

### 子どもを真ん中にした語り合い

- 日常的に授業・保育を参観・参加し、互いに学び合える雰囲気をつくる。
- 交換授業、教科担任制を計画的に取り組む。
- 子どもの写真、子どもの姿からどのような心の動きがあったのか語り合う。

### 園・校内研究会の質的向上・教育の見える化

- 子どもが学び合う学校と教職員が学び合う学校、この学びの循環が大事である。
- グループ別研究、ユニット研究など、研究を自分事にして互いに学び合う。
- 子どもも教師も探究心をもって学び続ける。
- 教育の見える化を行うことで、教職員のベクトルをそろえる。



### 校種を超えた学び合い(公開授業研究会、校種間交流等)

- 校種間の円滑な接続、学びの連続性を大切にする。
- 目指す子どもの姿の共有から、それぞれの発達段階に応じた指導・支援を検討する。

